

夢幻庵

鎌田舜英

北門書道会理事・弘玄書道会常任理事

今は亡き師佐藤中隠先生との修行場は、平川市切明の山の中腹にあった。立木の隙間からは鬱蒼うっそうと樹木が茂り、山々は幾重にも折り重なり絵巻物を見ているようで、木々の茂みの中からは、なんともいえぬ美しい鳥の声が聞こえていた。師はその修行場を「夢幻庵」と名付けていた。そして私は、書作に疲れると必ず温泉につかった。脱衣所には師の文字で、温泉の効能がまことしやかに書かれていた。

「この温泉を龍泉と名付く。その唇よりいづる湯なればなり……」

私は「この湯には本当に神秘の力があり、体を清め集中していると、必ず樹木の力が私の体に宿り、よい作品が出来る。」と心から信じていた。そして私の青春時代のほとんどはこの「夢幻庵」となり、作品はここから生まれたのである。

私は温泉の効能について師に聞いたことがあった。

『あれは龍神様のお湯だよ。これからは私ばかりに頼らないで、龍神様にも直接指導してもらいなさい。』師は真顔でそう言った。そのことが何を意味するのか、その時の私には何もわからなかったが、師が亡くなって始めてその時の言葉を思い起こす。

その日私は朝方までずっと先生の話を聞いた。「風邪を引いた。」と言っていた師は、その一週間後に入院し、もう二度と私と話すことは無かったが、その時の話は、その後の私をずっと支えるかけがえのないものである。そして今も、どこからともなく現れては作品のヒントを与えてくれるような気がするのである。

後から解ったことだが、龍には宇宙全体のバランスを保つ役目として、龍王神界、という思想があり、この地球を太古の時代から守り続けているという自然神の意味があるらしい。また龍は水神の象徴でもあり、必要のないときは沼地の底で眠り「伏龍(臥龍)」、必要なときが来ると、雲を呼び雨を呼び、天高く舞い上がるという「昇竜」。

いよいよ龍の年。これからの私の人生が伏龍か昇竜かは分からないが、たとえどんな時であっても、私はなぜかあの時の「夢幻庵」に守られているような気がするのである。

ただ、龍には一枚だけ逆さになった鱗があり、これを無意味に触ると龍は激怒するらしい(逆鱗)ので、これには要注意である。

月刊『弘前』

2012年1月号

特集「新年随想」より